

目的 縫製作業を能率よく正確に行うには種々の要素が考えられるが布地の裁断も重要なポイントの一つである。特に布地の裁断にあたっては単に一枚の布地を裁断する以外に何枚も布地を重ねて一度に裁断する場合があり、その際最上層と最下層の布地とでは布地がずれず裁断され問題になることをしばしば経験する。また布地の重ね合わせ方、布地の裁断方向と裁断ずれも問題となる。そこでこれまで我々は布地の重ね枚数、重ね合わせ方向の違いによる裁断時の布地ずれと物性との関係について実験を行ない報告した。今回は熟、未熟が裁断時の布地ずれにいかに関与を及ぼすかについて検討をした。

方法 被験者には健康な女子大生(19才)3名が被服専攻入学時に、入学時より半年経過した時点の2回裁断実験を行なった。

試料布は糸密度、厚さの異なる木綿平織を用いた。布地の重ね合わせ方はなか表、なか裏、なか表裏とし、裁断方向はたて、よこ、22°、45°、67°バイヤスとした。はさみは一般的に用いられている裁断はさみを使用した。

結果 裁断時の布地ずれは初回よりも被服実験・実習など授講し布地のあつかいに慣れたと思われる半年後の2回目の方がずれ寸法は多少であるが小さくなる傾向を示した。布地の重ね合わせ方においてはなか表、なか裏、なか表裏のずれ寸法は一定の傾向がみとめられなかった。これは試料布が表裏の区別がはっきりしてないことによるものと思われる。布地の方向においては布地の種類、重ね合わせ方により多少異なるがたて、よこ方向がバイヤス方向よりも大きくなる傾向を示した。